

## 39 時代劇

場面：時代劇

状況：江戸時代という設定の時代劇。剣の達人・鋭一郎と、幼馴染のお雪が再会する

登場人物：

A (女性、ナレーター)

B (男性、剣の達人 (榊 鋭一郎))

C (女性、町娘 (お雪))

(拍子木の音)

A: ある晴れた日の午後、鋭一郎はいつものように江戸の町を歩いていた。その日は剣の練習も休みで、のんびり気分転換をしていた。すると…

(犬の鳴き声)

B: 「…ん？」

A: 鋭一郎が足を止め、耳をすますと、それは迷子の犬だと分かった。近づいてみると、小さな子犬が体を震わせながら、母親を探しているようだった。鋭一郎はしゃがみこんで、そっと手を差し出した。

B: 「心配いらぬ、怖がるでない。」

A: その優しい声に、子犬は少しだけ近づいた。その時…

(走ってくる足音)

C: 「小太郎！小太郎、どこにいるの!？」

A: その声に鋭一郎は顔を上げた。そこに立っていたのは、幼なじみのお雪だった。

B: 「お雪…？」

C: 「え、鋭一郎さん…？」

A: 二人は互いに驚いて、立ちつくした。

C: 「鋭一郎さん…！こんなところで、どうして…。」

B: 「それは拙者のほうこそだ。何ゆえ、そんなに慌てておるのだ？」

(犬の鳴き声)

C: 「ああ、よかった…！小太郎、あなた、こんなところにいたのね…！」

A: お雪は子犬を抱き上げた。

B: 「その子は…？」

A: 鋭一郎が尋ねると、お雪は笑顔で答えた。

C: 「はい、知り合いのところで生まれた子犬で、しばらく預かっているんです。とてもやんちゃで、目を離れた間になくなってしまって…。探しても見つからないから、どうしようかと困っていたところなんです。」

B: 「そうか。見つかって本当によかった。」

A: 鋭一郎はそう言って、優しく笑った。お雪は、安心して子犬を抱きしめ、鋭一郎に頭を下げた。

C: 「ありがとうございます。鋭一郎さんえいいちろうがみみつけてくれなければ、どうなっていたことか…。」

B: 「礼れいにはおよおよばない。こうしてまた偶然ぐうぜん会えるなんて。何か縁なん えんがあるのやもしれぬな」

C/B: 「ふふふ」「ははは…」(ほぼ同時どうじにわらわらだだす)

A: ふたりふたりは、今度こんど茶屋ちやで会あう約束やくそくをした。